

子宮頸部内病変に対するレーザー円錐切除術の有用性： コールドナイフ円錐切除術との比較検討

江本 精¹⁾ 堀内 新司¹⁾ 大久保 誠²⁾
江口 冬樹¹⁾ 蜂須賀 徹¹⁾ 瓦林達比古¹⁾

¹⁾福岡大学医学部産婦人科学教室

²⁾福岡大学病院臨床工学センター

要旨：子宮頸部円錐切除術は子宮頸部の前癌病変である異形成や子宮頸部の初期癌である上皮内癌，微小浸潤癌などに対して最高病変の診断や治療目的で行われる小手術である。近年，本疾患の罹患年齢の低下や，女性の結婚年齢，出産年齢の上昇などに伴って，子宮頸癌および前癌病変患者の若年化傾向が強まり，子宮温存療法の必要性は益々高まっている。今回，1981年1月から1998年3月までの約18年間に福岡大学病院産婦人科にて，子宮頸部初期病変に対してNd/YAGレーザーメスにて円錐切除術が施行された101例および従来のコールドナイフにて円錐切除術が施行された111例併せて212例を対象として，後方視的に比較検討した。その結果，YAGレーザー法は，従来のコールドナイフ法に比較して，術中出血量の軽減と手術時間の短縮に極めて有用であった。

索引用語：円錐切除術，子宮頸癌，子宮頸部上皮内腫瘍，YAGレーザー